

論文

コーネルの地理書の幕末・明治初期の日本への影響

齋藤 元子

I はじめに

幕末の開国により西欧世界との交流が開始されると、欧米の国々から様々な分野の洋書が日本にもたらされた。地理学に関する書物としては、19世紀後半のアメリカで広く用いられていたシリーズ教科書であるコーネルの地理書を挙げる事ができる。この地理書の著者はサラ・ソフィア・コーネル (Sarah Sophia Cornell) という女性であり、彼女に関しては、地理書の中に記されている公立学校教師と The American Geographical and Statistical Society の corresponding member¹⁾ という肩書き以外、その経歴については明らかではない²⁾。しかし、日本の幕末・明治初期には、このコーネルの地理書を底本とする翻刻書や翻訳書が、英学³⁾を修めた人々の手によって複数出版されている。

本論文は、筆者がこれまで取り組んできたコーネルの地理書の日本への影響を論ずる研究に連なるもの⁴⁾である。本論文では、シリーズ教科書であるコーネルの地理書の内容を示した上で、コーネルの地理書の日本への到来時期を確定し、どのような人物によって、その翻刻書や翻訳書などが作成されたのかを明らかにする。そして、コーネルの地理書の最も古い翻訳書と考えられる1871(明治4)年刊行の青木輔清著『世界國名盡』に着目し、その底本の特定を試みる。

II コーネルの地理書の種類とその内容

コーネルの地理書は、一冊の教科書ではない。*Cornell's First Steps in Geography*(1858)・*Cornell's Primary Geography*(1854)・*Cornell's Intermediate Geography*(1855)・*Cornell's Grammar-School Geography*(1858)・*Cornell's High-School Geography*(1856)という5種類のシリーズ教科書と自然地理を扱った *Cornell's Physical Geography*(1870)がある。

コーネルの地理書は、最初に *Cornell's Primary Geography*(以下 *Primary G.* と記す)、*Cornell's Intermediate Geography*(以下 *Intermediate G.* と記す)、*Cornell's High-School Geography*(以下 *High-School G.* と記す)の3書がシリーズとして発行された。*Primary G.* は初等学校用、*Intermediate G.* は *Primary G.* 修了者用、*High-School G.* は中等学校用に書かれた。数年後に *Primary G.* よりもさらに入門的な *Cornell's First Steps in Geography* (以下 *First Steps in G.* と記す)と *Intermediate G.* の次のレベル、あるいはこれに替わるテキストとして *Cornell's Grammar-School Geography* (以下 *Grammar-School G.* と記す)が出版された(Cornell 1872:裏表紙)。また1870年には、5種類のシリーズ教科書とは別に、*High-School G.* と同じく中等学校向けの *Cornell's Physical Geography* (以下 *Physical G.* と記す)が出された(Cornell 1883:2)。

各書の内容を表1から表6に示したが、概説すると以下ようになる⁵⁾。First Steps in G.(頁数68)は、問答法により「地球」「海洋」「島」といった地理用語の定義と地図の読み取り方を学習する2部構成になっている(Cornell 1876)。Primary G.(頁数98)は、同じく問答法を用いて、地球の概略を学ぶ入門レッスン、自然地理に使われる用語の定義、地図の読み取り方の3部から成っている(Cornell 1857)。First Steps in G.とPrimary G.は、内容的にかなり重複しているが、First Steps in

表1 Cornell's First Steps in Geography の内容

| レッスン番号 | 学習事項 | レッスン番号 | 学習事項 |
|---------|-------------|---------|-------------|
| 1 | 地球, 地理 | 17 ~ 18 | 西半球 |
| 2 | 地図, 東西南北 | 19 ~ 20 | 東半球 |
| 3 | 北東・北西・南東・南西 | 21 ~ 25 | 北アメリカ |
| 4 | 半球 | 26 ~ 29 | 南アメリカ |
| 5 | 大陸 | 30 ~ 36 | ヨーロッパ |
| 6 | 五大陸 | 37 ~ 41 | アジア |
| 7 | 海洋 | 42 ~ 44 | アフリカ |
| 8 | 島, 半島, 地峡 | 45 | 英国領アメリカ |
| 9 | 岬, 山 | 46 ~ 47 | アメリカ合衆国 |
| 10 | 海, 港, 湾, 海峡 | 48 ~ 51 | 東部諸州 |
| 11 | 湖, 河川 | 52 ~ 55 | 中部諸州 |
| 12 ~ 16 | 1 ~ 11 の復習 | 56 ~ 63 | 南部諸州 |
| | | 64 ~ 69 | 西部諸州 |
| | | 70 ~ 72 | 準州 |
| | | 73 | 46 ~ 72 の復習 |
| | | 74 | オセアニア |

Cornell(1876)より作成

表2 Cornell's Primary Geography の内容

| レッスン番号 | 学習事項 | レッスン番号 | 学習事項 |
|---------|--------------|-----------|----------|
| 1 | 地球, 地理 | 86 | アメリカ合衆国 |
| 2 | 地図, 半球 | 87 ~ 93 | 東部州 |
| 3 ~ 4 | 東西南北 | 94 ~ 98 | 中部州 |
| 5 ~ 8 | 西半球, 東半球 | 99 ~ 104 | 南部州 |
| 9 | 島, 半島, 地峡 | 105 ~ 109 | 西部州 |
| 10 | 岬, 海岸, 山 | 110 | 東部諸州の概説 |
| 11 | 海洋, 港, 湾, 海峡 | 111 | 中部諸州の概説 |
| 12 | 湖, 河川 | 112 ~ 113 | 南部諸州の概説 |
| 13 ~ 20 | 西半球 | 114 ~ 115 | 西部諸州の概説 |
| 21 ~ 31 | 東半球 | 116 | オセアニア |
| 32 ~ 41 | 北アメリカ | | |
| 42 ~ 51 | 南アメリカ | | 地理用語の発音表 |
| 52 ~ 65 | ヨーロッパ | | |
| 66 ~ 75 | アジア | | |
| 76 ~ 85 | アフリカ | | |

Cornell(1857)より作成

表3 *Cornell's Intermediate Geography* の内容

| レッスン番号 | 学習事項 |
|---------|---------------------------------------|
| 1 | 地球, 地理, 地理の種類 |
| 2 | 政治地理で使用される用語の定義 |
| 3~7 | 数理地理で使用される用語の定義 |
| 8~9 | 自然地理で使用される用語の定義 |
| 10~46 | 北アメリカ |
| 47~60 | アメリカ合衆国 |
| 61~62 | 西インド諸島 |
| 63~71 | 南アメリカ |
| 72~95 | ヨーロッパ |
| 96~104 | アジア |
| 105~112 | アフリカ |
| 113~116 | オセアニア |
| 117~121 | 自然地理の要約 |
| 122~125 | 復習問題 |
| 126~127 | 地図作成 |
| 表 | 主要国の面積と人口, 主要都市の人口, 主要山脈, 河川, 湖, 島 |
| 統計表 | アメリカ合衆国州別農業統計 国際通貨比較 主要国の輸出高 |

Cornell(1872) より作成

表4 *Cornell's Grammar-School Geography* の内容

| レッスン番号 | 学習事項 |
|--------------------------------------------------------------------------|----------------------------|
| 1~5 | 数理地理 |
| 6~14 | 自然地理 |
| 15~16 | 政治地理 |
| 17 | 世界地図に関する全般的な問い |
| 18~19 | 地図作成 |
| 20~24 | 北アメリカ |
| 25 | 北アメリカ, アラスカ |
| 26~33 | 英国領アメリカ, デンマーク領アメリカ |
| 34~95 | アメリカ合衆国 |
| 96~105 | メキシコ, ベリーゼ, 中央アメリカ, 西インド諸島 |
| 106~114 | 南アメリカ |
| 115~140 | ヨーロッパ |
| 141~149 | アジア |
| 150~156 | アフリカ |
| 157~160 | オセアニア |
| 全般的な復習 | |
| 地理に関する表: 大陸ならびに世界の主要国の正確な呼び方・面積・人口 世界の主要な島嶼・山・湖・河川の正確な呼び方・面積あるいは高さ・長さ | |
| 統計表Ⅰ: 1860年のセンサスに基づくアメリカ合衆国州別農業統計 | |
| 統計表Ⅱ: アメリカ合衆国ドルと諸外国との通貨比較 | |
| 統計表Ⅲ: 世界の主要都市ならびに1860年のセンサスに基づくアメリカ合衆国の主要都市の人口 | |

Cornell(1870) より作成

表5 Cornell's High-School Geography の内容

| レッスン番号 | 学習事項 | レッスン番号 | 学習事項 |
|---------|-----------------------------|---------|-------------------|
| パート1 | 概説地理 | パート3 | 自然地理 |
| 1 | 定義：地球の形態と動き | 1 | 地球の構造・密度 |
| 2 | 定義：地球表面の距離 | 2 | 陸地と水域の分布 |
| 3 | 定義：ゾーン | 3 | 火山, 地震 |
| 4~5 | 定義：地球の生態 | 4 | 台地, 低地, 平野 |
| 6 | 定義：人類 | 5 | 平野, 砂漠, 谷, 山道 |
| 7 | 世界 | 6 | 島, 砂州, 岩礁 |
| 8~17 | 北アメリカ | 7 | 泉, 湖 |
| 18~67 | アメリカ合衆国 | 8 | 川, 運河 |
| 68~71 | メキシコ, ユカタン, ベリーゼ, 中央アメリカ | 9 | 大洋 |
| 72~76 | 西インド諸島 | 10 | 海流, 海 |
| 77~78 | 北アメリカ復習 | 11 | 大気 |
| 79~91 | 南アメリカ | 12 | 風 |
| 92~132 | ヨーロッパ | 13 | 水蒸気, 雨, 雪, 氷河 |
| 133~144 | アジア | 14 | 気温, 等温線 |
| 145~153 | アフリカ | 15 | 鉱物資源の分布 |
| 154~160 | オセアニア | 16 | 植物, 動物, 人類の分布 |
| 161~164 | 世界主要国の国家形態・宗教 | 復習問題1~6 | |
| パート2 | 数量地理 | 生徒への助言 | |
| 1 | 定義：地球の動き | 付録 | 地球の自然区分の説明法則 |
| 2 | 定義：地球の形 | | ・陸の区分 ・水域の区分 |
| 復習問題1・2 | | | 地図の内容を記憶するための指南 |
| | | | 地球儀 |
| | | | 地球儀上の問題を解く法則 1~18 |
| | | | 用語集 |

Cornell(1860) より作成

表6 Cornell's Physical Geography の内容

| 章 | 学習事項 |
|----|------------------------|
| | 地理とは |
| | 自然地理・数理地理・政治地理とは |
| 序 | 数理地理の原理 |
| | 惑星としての地球 |
| | 専門用語の定義 |
| | 地球の自転に起因する現象 |
| 1 | 地球の構造 |
| 2 | 大陸と島嶼 |
| 3 | 低地, 台地, 山地 |
| 4 | 火山と地震 |
| 5 | 海洋 |
| 6 | 内陸と水域 |
| 7 | 大気 |
| 8 | 植物界 |
| 9 | 動物界 |
| 10 | 人類 |
| 11 | 人類が利用可能な鉱物・植物・動物資源 |
| 12 | アメリカ合衆国の自然特質 |
| 表 | 大陸・主要島嶼・山脈・海洋・湖・河川の大きさ |

Cornell(1883) より作成

G. の記述はより単純明快であり、平易な単語が使用されている。 *Intermediate G.* (頁数 100) と *Grammar-School G.* (頁数 122) は、政治地理・自然地理・数理地理に使われる用語の定義、地図解説、世界とアメリカ国内の地誌、地図作成法などが盛り込まれている (Cornell 1870,1872)。 *High-School G.* (頁数 405) は、地誌、数理地理、自然地理の 3 部から構成されている。第 1 部の地誌が大半を占め、アメリカ諸州と世界各国の自然および人文地理の特徴が記されている (Cornell 1860)。 *Physical G.* (頁数 104) は、地球の概略に始まり、地形、地質、気候、動植物・天然資源の分布、人種、アメリカの自然の特徴などが論じられている (Cornell 1883)。 *High-School G.* と *Physical G.* は、中等学校用に書かれたため、内容が他の 4 書に比べて、かなり高度である。

コーネルの地理書すべてに共通する特徴は、まず地理の概念や用語の定義を示した上で、地図を参照しながら、世界の各地域について学習するというスタイルである。コーネルの地理書の中で最初に出版された *Primary G.* の序文において、コーネルはシリーズ教科書執筆の動機を「数年間に及ぶ公立学校教師の経験から、現在普及している地理教科書を検証した結果、地理的知識が記憶に残らない原因は以下の点にあることを突き止めた。第一に定義の定まっていない用語を乱用している。第二に系統だった記述がなされていない。第三に地図が不明瞭である。つまり、今までの教科書にはシステムが致命的に欠如している。地理という興味深い科学を、無味乾燥な状況から救い出すために、段階を踏んだ発展的教授法に基づき、学習者の関心を持続させながら、安易に忘れることのない地理的知識を身につけさせることの必要性を痛感した」 (Cornell 1857:5-6) と述べている。コーネルは、改革のキーワードとして“one thing at a time” という言葉を掲げている (Cornell 1857:5)。このキーワードは、多くのことを一時に詰め込まないことを意味する。しかし、関連する事柄

は時を置かずに、連続性を持って教えるということを用意していたと解釈できる。

III コーネルの地理書の日本への到来

蕃書調所・開成所・昌平坂学問所・箱館奉行所など徳川幕府の公的機関の旧蔵書を保存する静岡県立中央図書館葵文庫には、「蕃書調所」の印記があるコーネルの *High-School G.* (1860) が所蔵されている。蕃書調所は、洋書の翻訳と洋学教育を目的として 1856(安政 3) 年に開設された幕府の機関である。1862(文久 2) 年 5 月には洋書調所と名称が改められる。よって、この *High-School G.* は、発行年の 1860 年から 1862 年 5 月までの間に日本にもたらされたと考えられる。筆者が調査した範囲においては、これが日本に最も早く伝来したコーネルの地理書と確認できるものである。蕃書調所における洋学教育は、開設から 1860(万延元) 年 5 月頃までは、蘭語の文法書講読のみであったが、5 月以降に英語と仏語が加わった (廣政 1993:162-163)。このことから、*High-School G.* は、蕃書調所の英語教育開始期とほぼ同じ頃に、教科書として使われ始めたと思なすことができる。

蕃書調所は、洋書調所という名称を経て、1863(文久 3) 年 8 月に開成所となる。1866(慶応 2) 年には、開成所教授の渡部一郎によりコーネルの *Primary G.* の一部が『地學初歩』というタイトルで翻刻されている。よって、*Primary G.* も、1866 年以前に伝来していたことは明らかである。『地學初歩』の内容に関しては、次章で詳しく論じる。

上述の葵文庫には、開成所の印記のあるコーネルの *Intermediate G.* も所蔵されている (大庭 1996:33)。開成所は維新後明治政府に接收され、1869(明治 2) 年に開成学校となるが、*Intermediate G.* も、維新前に入手したものとみるのが妥当であろう。

一方、福沢諭吉は、1867(慶応 3) 年に渡米した

際、ニューヨークで有数の出版社兼書店であり、コーネルの地理書の版元でもあるアップルトン社 (D. Appleton & Co.)において、大量の書籍を購入している。その費用は、仙台藩と和歌山藩からの預かり金と自己資金によるが、仙台藩に渡された目録には、コーネルの *Grammar-School G.15* 冊と *High-School G.34* 冊が記されている (金子 1979)。

以上、6種類のコーネルの地理書のうち、*First Steps in G.* と維新後の1870年に出版された *Physical G.* を除く4種類のコーネルの地理書は、幕末までに日本に伝来していたことがほぼ明らかである。*First Steps in G.* に関しては、次章で論証するが、*Primary G.* の翻刻書『地學初歩』の中に、同書からの引用が認められる。したがって、*First Steps in G.* も、1866年以前に伝来していたと考える。

IV 翻刻書『地學初歩』

上述したように、コーネルの *Primary G.* は、1866(慶応2)年渡部一郎により、『地學初歩』という書名で翻刻書が出版された。渡部は、蘭学を修めた後、英学に転じ、下田表御役所書物御用見習を振り出しに、開成所教授、沼津兵学校英語主任、長崎英学校校長、東京外国語学校校長を務め、一貫して英学教育に従事した人物⁶⁾ である (鮎澤 1952: 60; 惣郷 1990: 226,228)。

『地學初歩』は、和紙35枚から成る。表紙に“コル子ル氏著 地學初歩 渡部氏蔵版 CORNELL'S PRIMARY GEOGRAPHY. REVISED.” “CORNELL'S PRIMARY GEOGRAPHY FOR THE USE OF SCHOOLS. FIRST EDITION YEDO. THE 2nd YEAR OF KEI-OU.” と記されている。*Primary G.* の改訂版とあるので、1857年の第2版を翻刻したと考えられる。*Primary G.* は、第II章で紹介したように、116のレッスンから構成されている。これに対して『地學初歩』は、わずか18レッ

スンで、翻刻版とはいうものの、まったくのダイジェスト版である。しかし、両書の内容を詳細に比較してみると、『地學初歩』が単に *Primary G.* の文章を抜粋したものではないことが明らかになってくる。

『地學初歩』の内容を、*Primary G.* と比較する形で、表7に示した。*Primary G.* は、第II章ですでに紹介したが、問答法を用いて、地球の概略を学ぶ入門レッスン(1~8)・自然地理に関する用語の定義(9~12)・地図の読み取り法(13~116)を学習する内容となっている(表2参照)。*『地學初歩』* のレッスン1・2は、*Primary G.* のレッスン1・2に対応している。しかし、最初の問答“*What is the earth? The earth is the planet on which we live.*” だけは、*Primary G.* では“*What is the planet on which we live called? It is called 'The Earth.'*” となっており、文章が異なる。ところが、*Primary G.* よりもさらに入門的な教科書である *First Steps in G.* を見ると、『地學初歩』と同一の文章でレッスン1が始まっている。*First Steps in G.* の文章は、*Primary G.* に比べて、より単純である。編者である渡部は、なるべく平易な文章から始めるという意図に基づき、最初の一文を *First Steps in G.* の文章と差し替えたのではないかと考える。このことは、*First Steps in G.* が、他のコーネルの地理書同様に、幕末に日本に伝来していたことを証明するものといえよう。

レッスン3から6は、*Primary G.* のレッスン3から8の一部を抜粋したものである。しかし、単に原文をそのまま引用しているのではない。問いや答えに大陸名が並ぶ際、渡部は意図的に順序を入れ替え、アジアを筆頭に記している。例えば、「東半球にある大陸は何か？」という問いに対して、*Primary G.* の答えは「ヨーロッパ、アジア、オーストラリア、アフリカ」となっているが、『地學初歩』ではヨーロッパとアジアが入れ替わっている。また、「南北アメリカ大陸の東に位置する大陸は何か？」といったように、*Primary G.* がアメ

表7 『地學初歩』の内容

| レッスン番号 | 学習事項 | Cornell's <i>Primary Geography</i> の当該箇所 |
|--------|-----------------------------------|-----------------------------------------------------------------------|
| 1 | 地球, 地理 | レッスン 1 |
| 2 | 地図, 半球 | レッスン 2 |
| 3 | 陸と水 | レッスン 3・5・6・7の各一部 |
| 4~5 | 東西南北 | レッスン 3・4・6・7の各一部 |
| 6 | 大陸 | レッスン 8の一部 |
| 7 | 島, 半島, 地峡, 岬, 浜, 海岸, 山, 山脈, 火山 | レッスン 9・10 |
| 8 | 大洋, 海, 港湾, 海峡, 溝, 入り江 | レッスン 11 |
| 9 | 湖, 河川, 泉, 河口, 溪水 | レッスン 12 |
| 10 | アジア諸国の概説 | Introductory Remarks on the Map of Asia (p.57) レッスン 75 |
| 11~13 | ヨーロッパ諸国の概説 | Introductory Remarks on the Map of Europe(p.45) レッスン 63~65 |
| 14 | アフリカ諸国の概説 | Introductory Remarks on the Map of Africa(p.65) レッスン 85 |
| 15 | 北アメリカ諸国の概説 | Introductory Remarks on the Map of North America (p.29) レッスン 41 |
| 16~17 | 南アメリカ諸国の概説 | Introductory Remarks on the Map of South America (p.37) レッスン 50~51 |
| 18 | オセアニアの概説 | レッスン 116 |

『地學初歩』(1866)・Cornell(1857)より作成

リカ大陸を基点にその他の大陸の位置関係を問うているのに対して、『地學初歩』は「アジア大陸の東に位置する大陸は何か?」と、基点をアジアに置き換えている。

レッスン7から9は、*Primary G.*の自然地理に関する用語の定義に該当する部分(レッスン9~12)で、全文が収録されている。ただし、*Primary G.*には、各用語を示す図と挿絵が掲載されているが、『地學初歩』は図のみである。

レッスン10から18は、大陸別に世界の国々を概説したものである。*Primary G.*では、まずは大陸ごとの地図が示され、国の位置関係や前のレッスンで学んだ地理用語を地図から読み取っていく設問が多く部分を占めている。そして、最後にそれぞれの国の気候や主要産業などに関する短い説明がなされている。『地學初歩』に地図は掲載されているが、地図に関する問いはすべて省かれている。“Introductory Remarks on the Map”と題する簡単な地図の解説と最後の国紹介だけが収録さ

れている。ここにおいても、渡部は順序の入れ替えを行っている。*Primary G.*では、北アメリカ・南アメリカ・ヨーロッパ・アジア・アフリカ・オセアニアの順になっているが、『地學初歩』は最初にアジアを取り上げ、ヨーロッパ・アフリカ・北アメリカ・南アメリカ・オセアニアと続いている。*Primary G.*で紹介されているアジアの国は、シベリア・中国・インド・ベルチスタン・アラビア・トルコ・ペルシャ・トルキスタン・アフガニスタンの9カ国で、日本は含まれていない。にもかかわらず、『地學初歩』では、日本がアジアの最初に取り上げられている。

これまで『地學初歩』は、コーネルの*Primary G.*の一部を抜粋し、大陸の順序を入れ替えて、アジアの筆頭に*Grammar-School G.*の日本に関する記述を挿入した書物であるという指摘が、鮎澤(1952:62-64)・石山(1965:3;1975:18)・中川(1977:305-306)により、なされてきた。日本に関しては、鮎澤(1952:62-63)は渡部による加筆とみなし

た。しかし、石山(1965:3)により、*Grammar-School G.*からの引用であることが明らかにされた。

ところが、『地學初歩』の内容を一文ずつ *Primary G.*と照合させてみると、『地學初歩』の *Primary G.*との違いは、上記のことだけに止まらないことが明らかになった。まずは、*Primary G.*には存在しない *First Steps in G.*と同一の文章が認められた。さらに、*Primary G.*において、アメリカ大陸を主語とした文章が、アジアを主語とするものに書き改められていた。編者の渡部は、日本人読者のために、アジアを記述の中心に据えるべく、このような改変を施したと考えられる。したがって、『地學初歩』は *Primary G.*の単なる翻刻書ではなく、渡部の工夫が加えられた翻刻書と呼ぶべきものである。

『地學初歩』は、宇田川榕精『地學初歩和解』(1867・慶応3年)、樫木寛則『地學初歩挿訳』(1872・明治5年)、尾形良造『地學初歩直訳』(刊行年不詳)といった翻訳書を生み出した⁸⁾。『地學初歩和解』は『地學初歩』の翌年に出版されたが、国立国会図書館が所蔵する『地學初歩和解』には、「開成所」の印記がみられる。おそらく、開成所において『地學初歩和解』は、教授の渡部が翻刻した『地學初歩』と併用されていたと考えられる。

V 翻訳書

『日本教科書大系 近代編 第十七巻 地理(三)』の地理教科書総目録(海後 1966:495-529)ならびに『近代教科書の成立』の明治初期の翻訳教科書表(仲 1949:413-416)には、コーネルの地理書を底本とする12種類の書籍が示されている。①1871(明治4)年青木輔清『世界國名盡』、②1872(明治5)年西村恒方『萬國地理訓蒙』、③1873(明治6)年色川御胤『訓蒙圖解地學のふみ』、④1873(明治6)年東湾楼主人『萬國地理物語初篇』、⑤1873(明治6)年文部省『地理

初歩』、⑥1873(明治6)年鳥山啓『訓蒙天然地理學』、⑦1874(明治7)年井出猪之助『小學地理問答』、⑧1875(明治8)年井出猪之助『萬國地誌略』、⑨1875(明治8)年名和謙次『小學教授次第』、⑩1877(明治10)年帆足義兼『地形論』、⑪1877(明治10)年加藤熙『小學誦誦 萬國歌盡』、⑫1883(明治16)年関藤成緒『學校用地文學』である。これら12書は、コーネル著の抄訳あるいはコーネルとミッチェル(S. Augustus Mitchell)やゴールドスミス(T. Goldsmith)などの著書を合わせた抄訳と解説が添えられているが、コーネルのいずれの地理書を底本としたかは明らかにされていない。各書の翻訳編者は、経歴が詳らかでない者もいるが、幕末に英学を修めた人々である。大半の人物が、上記以外にも、歴史・修身・科学など他分野の翻訳書を残している。彼らは、西洋の学問を貪欲に吸収しようとした明治初期の日本において、翻訳家として活躍した一群とみなすことができよう。

筆者は、上記の12書において、コーネルの地理書がどのような形で言及されているかを調査した。12書の中で、具体的なコーネルの地理書名を底本として挙げているものは、1書もなかった。それぞれの書におけるコーネルへの言及ならびに著者の略歴を示すと以下のようになる。

①青木輔清『世界國名盡』

「此書ハ皆一千八百六十九年亜版コル子ル氏所著ノ地理誌ヨリ抄譯ス」(青木 1871:2)と凡例に記されている。

著者の青木輔清は、埼玉県出身の士族で、多くの翻訳書や参考書・辞書を執筆している。『世界國名盡』から2年後の1873(明治6)年には、その解説書である『世界國名盡解』を出版している。また、青木が著した修身教科書『小學教諭 民家童蒙解』(1876・明治9年)の後半部分は、ウィラード(Emma Willard)の *Morals for the Young*(1857)を底本として、高祖(1976)により明らかにされている。

る。1876(明治9)年には、現在の学習指導要領にほぼ相当する『師範学校改正小学教授方法』も著している(唐澤 1984:124-125)⁹⁾。

②西村恒方『萬國地理訓蒙』

「亜米利加國コロル氏撰 日本西村恒方譯」(西村 1872:引導篇1)と冒頭にある。

著者の西村恒方の人物像は不明であるが、グッドリッチの *Peter Parley's Universal History on the Basis of Geography*(1837)の翻訳書『萬國歴史直訳』(1872・明治5年)も出版している。

③色川御胤『訓蒙圖解地學のふみ』

「米人マイケル、コルル両氏の地理書中より地學の大體を抄譯し」(色川 1873:上2)とあり、ミッチェルとコーネルの地理書の抄訳である。

著者色川御胤の人物像は不明で、『訓蒙圖解地學のふみ』以外の著作も確認されていない。

④東湾楼主人『萬國地理物語初篇』

「往古(むかし)のものがたりに浦島太郎といへる人が諸国の嶋々をめぐるめづらしき事を見しといふはなしもあるが其子孫は浦島屋太郎吉といつる町人なりて東京つきじの片ほとりに居住し次第に入来る萬國の人々を見る」という主人公が、「此度亜米利加國の地理學者でコルルといふ先生が地理書を改正」したので、その「コルル先生の案内にて」「コルル先生に従つて横濱より飛脚船に打乗り」アジアの各地を旅するという形式の物語である(東湾楼主人 1873:上1,2,5,6,下5)。浦島太郎の子孫であるという主人公の住む築地は、1869(明治元)年に外国人居留地が開設された土地であり、来日した欧米人を間近に見るようになったことから、世界への関心の目が開かれ、コーネルの案内で海外に旅立つという状況設定となっている。初編の巻末には、アジアに続き、二編ヨーロッパ、三編アメリカ、四編アフリカ・大洋州が刊行予定であると広告されているが、二編以降が実際

に出版されたかは不明である。

著者の東湾楼主人についてはこれまで明らかにされていないが、『世界國名盡』の著者青木輔清は号を東江・東園と称し、東江楼主人と記名した書もある(高祖 1976:86;1977:26)ことから、東湾楼主人は青木とも考えられる。このことについては、第七章において、詳しく論じたい。

⑤文部省『地理初歩』

師範学校の編纂により、文部省が刊行した『地理初歩』は、コーネルへの言及ならびに、底本に関する情報は一切記載されていない。

⑥鳥山啓『訓蒙天然地理學』

「此書は亜版コルル氏の地理誌より譯出」したものであるが、他の地理誌や理学書の説も加え、原書を簡約にするも原文の大意を失わないように努めたという説明が凡例に示されている(鳥山 1873:上1)。

著者の鳥山啓は、紀州田辺藩の出身で、紀州本草学の伝統に連なる博物学者であった。和歌山中学の教師時代に南方熊楠を教え、多大な影響を与えた¹⁰⁾。

⑦井出猪之助『小學地理問答』

世界地理を扱った巻一と日本地理を扱った巻二の2冊からなり、巻一の凡例に「此書第一卷原本ハ『コルネル』氏ノ地理書ニ據テ抄譯シ第二卷本邦ニイタリテハ諸書ヨリ抄出シテ更ニ地理ヲ詳ニスルモノナリ」(井出 1874:巻一凡例1)とある。よって、巻一の底本がコーネルの地理書であったことがわかる。

本書と⑧『萬國地誌略』の著者である井出猪之助は、旧福山藩士で、藩校誠之館・大学南校・慶応義塾で英学を修めた。東京師範学校においてアメリカ人スコットに師事し、長年教師を務めた¹¹⁾。この2書のほか、『暗射地球全図記』(1874・明治7年)、『小學日本暗射図解』(1875・明治8年)など

の地理書を著している。

⑧井出猪之助『萬國地誌略』

「此書原書ハミッチェル氏ゴールドスミス氏及ピコルネル氏等ニ據テ抄譯ス」「邦國ノ幅員人口ノ多少ハミッチェル氏原本ニ據リテ之計數シ」(井出 1876: 上巻頭)と凡例にある。ミッチェル・ゴールドスミス・コーネルの地理書を底本としているが、統計数値は、主にミッチェルの地理書に依拠していたことがわかる。

⑨名和謙次『小學教授次第』

初編・第二編の綴字部・単語部, 第三編の皇国地理部, 第四編の皇国史略部, 第五編の萬国地理部の5編からなる。このうち第五編の巻頭に「此部原本ハ『ゴールドスミス氏』『ガヨット氏』及ビ『コルネル氏』ノ地理書ヨリ抄譯スルニ繫ルトイヘドモ, 類ニ觸レテ他書ヲ接引スル者, 亦少カラズトス」(名和 1874: 第五編巻頭)とあり, 世界地理に関する底本の一書として, ゴールドスミスやギョーとともにコーネルの地理書が用いられたことが示されている。

著者の名和謙次は, 沼津兵学校附属小学校教授方¹²⁾で, 『十八史略字解』(1877・明治10年)『修身訓蒙』(1878・明治11年)などの著書も残した。

⑩帆足義兼『地形論』

4巻からなり, 「米國コー子ル著 帆足義兼譯 中村正直校正」と巻一は巻頭, 巻二以下は表紙に記されている(帆足 1877-1879)。

帆足義兼については, 他の著作は見当たらず, 巻末に記されている「千葉県士族」という身分以外は明らかでない。ただし, 本書の校正を, 中村正直が担当していることから, 中村と親交のあった明六社会員, あるいは, 中村が設立した私塾同人社の教師であった可能性が考えられる。

⑪加藤熙『小學語誦 萬國歌盡』

「此書ハ, 千八百六十九年, 我明治三年, 亜版^マル子ル氏所著ノ地理誌ニ因リテ抄譯セル, 我友青木氏本ノ世界國盡トイヘル, 明治四年ノ新説ニ依リ, 聊他書ノ新説ヲ加ヘ, 我塾童ノ背誦ニ便ナラシム」(加藤 1877: 序)と記されている。「青木氏本ノ世界國盡」とは, 青木輔清の『世界國名盡』である。したがって『小學語誦 萬國歌盡』の底本は, コーネルの地理書ではなく, 『世界國名盡』が底本である。著者の加藤熙は, 笠間藩出身の国学者で, 藩校時習館, 長州藩校明倫館などで儒学等を講じた(石山ほか 1996: 123)。加藤自身が英学に通じていた証拠はない¹³⁾。

⑫関藤成緒『學校用地文學』

「余嚮キニ文部省ノ命ヲ承ケ英國チャンブル氏著ス所ノ百科全書中ノ地文學ヲ譯セリ竊ニ聞ク其書近日學校教科書ニ用フルモノアリト然ルニ百科全書ハ本ト學校用書ノ為メニ作ルモノニ非レバ其體裁固ヨリ教科書ニ適セズ且ツ近來文部省頒布ノ小學教則綱領ニ合ザル所アルヲ憾ムルノミ頃口偶マ同氏ノ著ニシテ學校用書ノ為メニ作レル地文學ノ小冊子ヲ得タリ取テ之ヲ閱スルニ體裁固ヨリ簡略ナレドモ我邦小學ノ教科書ニハ頗ル適セルヲ覺ユ因テ不文ヲ顧ミズ讀ニ随テ之ヲ譯セリ若シ百科全書地文學ニ代ヘテ之ヲ用フルコトアラバ庶幾クハ教則綱領ノ主旨ニ差ハザランカ」「此書原本ハ冗長ニ過グル所アリ或ハ簡略ニ過グル所アリ今其冗長ナルヲ削リ略ニ過グル所ハ^コル子ル氏ノ地文學ヲ取テ譯述シ務メテ教則綱領ノ主旨ニ適ハンコトヲ求ム」(下線は原文による)(関藤 1883: 1)と, 同書執筆の動機が詳細に述べられている。

文部省は1876(明治9)年から1883(明治16)年にかけて, チャンバース兄弟(William & Robert Chambers)編纂の百科事典(Chambers's Encyclopedia 1859~1868)を翻訳した『百科全書』を刊行しているが, 関藤はそこで地文学篇の翻訳を担当している。その後, 小学校の地理教科書

としてより適切なものとして、同じチャンバースの著書を底本に作成したのが『學校用地文學』である。コーネルの地理書は、補足本として利用されている。関藤成緒は、福沢諭吉のもとで英学を学び、文部省官吏や師範学校校長などを務めた¹⁴⁾。

コーネルの地理書の翻訳に関わった人物の間には、青木輔清と加藤熙の関係のみならず、複数の交流が認められる。例えば、前章で取り上げた『地學初歩和解』の著者宇田川榕精が著した『小學生理訓蒙』は、青木により出版されている(唐澤 1984:125)。また、青木の『師範學校改正教授方法』は、同じく前章で取り上げた『地學初歩挿訳』の著者榎木寛則が校閲し、加藤が推薦文を寄せている(唐澤 1984:124)。彼らとコーネルの地理書との出会いは、英学を介した人物交流の中から発生したものと推測できる。

以上の調査をまとめると、海後(1966:495-529)ならびに仲(1949:413-416)が示した12書のうち、世界地理の記述に関して、コーネルの地理書を唯一底本に掲げているものが①青木輔清『世界國名盡』・②西村恒方『萬國地理訓蒙』・④東湾楼主人『萬國地理物語初篇』・⑦井出猪之助『小學地理問答』・⑩帆足義兼『地形論』の5書、コーネルの地理書を含む複数の地理書を底本とするものが③色川御胤『訓蒙圖解地學のふみ』・⑥鳥山啓『訓蒙天然地理學』・⑧井出猪之助『萬國地誌略』・⑨名和謙次『小學教授次第』・⑫関藤成緒『學校用地文學』の5書、翻訳書からの引用が①加藤熙『小學諳誦 萬國歌盡』の1書、コーネルに関する記述がないものが⑤文部省『地理初歩』の1書ということが、明らかとなった。

VI 青木輔清『世界國名盡』とコーネルの地理書

仲(1949:413-416)と海後(1966:495-529)が示した明治初期の翻訳教科書群において、1871(明

治4)年に出版された青木輔清による『世界國名盡』は、コーネルの地理書の抄訳であることを記している最初の教科書である¹⁵⁾。中川(1978:51-52)は、日本の近代地理教育史を論じた著作において、『世界國名盡』を明治初頭の学制期に文部省が使用を推奨した小学地理書の一冊であると紹介している。しかし、これまで同書に関する研究はまったく見当たらない。本章では、『世界國名盡』の内容を示し、同書がいずれのコーネルの地理書を底本として作成されたかを明らかにしたい。

1. 『世界國名盡』の内容

『世界國名盡』は、二十四丁(和紙24枚を半折りにして綴じたもの)の書である。読み物ではなく、一種のデータブックといえる。冒頭の凡例において、青木は同書出版の意図を次のように述べている。開国により日本は世界との交流を始めたが「唯他邦ノ人ヲ見レバ概レテ之ヲ唐人ト呼ビ舶來ノ米ヲ食スレバ皆之ヲ南京米ト稱ス甚シキニ至テハ盟約通親ノ國ヲモ知ラザル者アリ」という海外知識の欠落状況を憂慮し、「是今マ世界中著名ナル國名ヲ採譯シ加フルニ人民ノ多寡ト土地ノ廣狭ヲ以テ附スルニ高名ノ都港ト里程ノ遠近ヲ交ヒ以テ郷校中初テ入學ノ兒童ニ習讀セシメ聊カ智識ヲ擴メントス」(青木 1871:凡例1)、つまり、世界の主要国名・人口・面積・都市などを子どもに習得させ、知識を広めようとしたのである。

文中の郷校とは、江戸時代から明治初期にかけて存在した教育機関の一つであり、武家の子弟を対象に藩校の延長として設けられたものと庶民の教育機関として開設されたものがあつたが、後者も幕府あるいは諸藩により何らかの保護・監督を受けていた点においては、寺子屋と一線を画するものであつた(石川 1957:151)。青木自身も郷校の教師であつたことが、後に紹介する『世界國名盡』の解説書に記されている。青木は、郷校に入学した児童のために世界地理の啓蒙書として『世界國名盡』を著した。それが廢藩置県や学制

の発布を経て、尋常小学校の教科書として文部省から認知されたと考えられる。

『世界國名盡』は、4項目より構成されている。第1項目は、「世界國名概略」と題して、五大洲(亜細亜・阿非利加・歐羅巴・亜米利加・澳太利)と国別の面積・人口・漢字による国名表記の種類が示されている。取り上げられている国(植民地を含む)は、亜細亜洲14・歐羅巴洲17・阿非利加洲17・亜米利加洲北部11・亜米利加洲南部12・澳太利洲1である。掲載国の中には、面積や人口が記されずに、国名のみが掲げられている国もある。

第2項目は、「盟約通親之國」と題して、日本と修好通商条約を締結した16カ国の国名と仮調印および本調印の日付が記されている。

第3項目は、「各國大都府並通商之地概略」と題して、五大洲別に首都と通商都市の人口と「日本武州品川海」からの距離が示されている。取り上げられている都市は、亜細亜洲23・歐羅巴洲26・阿非利加洲6・亜米利加洲11・澳太利洲2である。品川からの距離が記されているのは、そのうちの26都市に過ぎない。各都市名の上に●が付されているものが首都であり、○が付されているものが通商都市である。

最後の第4項目は、「各國內大別」と題して、日本・中国・東インド諸島・イギリス・アフリカ群島・アメリカ合衆国の地域や州名を記している。

2. コーネルの地理書との関係

前章の①で示したように、『世界國名盡』の凡例には「此書ハ皆一千八百六十九年亜版コル子ル氏所著ノ地理誌ヨリ抄譯ス」と記されている。Pittser (1997: 243)によれば、コーネルの地理書のうち、1869年に改訂版あるいは重版が出されたのは、*Grammar-School G.*の1種類だけである。よって、『世界國名盡』の底本は、*Grammar-School G.*の可能性が高い。青木は「人民ノ多寡ト土地ノ廣狹モ皆同氏(筆者注: コーネル)ノ説

ニ據ル然レドモ是素ヨリ密數ニアラズ唯其概畧ナリ又原書ニ其數ヲ缺モノハ強テ之ヲ充タサズ蓋シ誤認ヲ恐ルレバ也」(青木 1871: 凡例2)と述べ、数値が欠落している部分もそのまま補足せず、コーネルの原書を忠実に引用したことを明らかにしている。

1869年版は、1868年に出版された第2版の重版である。第II章で考察に使用した1870年版の*Grammar-School G.*(表4参照)も1868年版の重版であり、1869年版と1870年版は同一内容と推測できる。よって、1870年版を比較に用いることは、妥当である。では、青木は*Grammar-School G.*のどの部分を引用したのであろうか。*Grammar-School G.*と『世界國名盡』の内容を項目ごとに照合させた結果、以下のことが明らかになった。

第1項目は、*Grammar-School G.*の巻末に添付されている「地理に関する表: 大陸ならびに世界の主要国の正確な呼び方・面積・人口」からの引用データである。青木は、*Grammar-School G.*が使用している面積単位の平方マイルを坪と同等であるとみなし、同じ数値に坪を付している。アフリカのモザンビークやセネガルなどの人口は、*Grammar-School G.*に記載がなく、『世界國名盡』でもそのまま空欄になっている。イギリスに関しては、*Grammar-School G.*はイングランド・スコットランド・ウェールズ・アイルランドを個々に記載しているが、『世界國名盡』ではそれらの合計数が「英吉利^{エギリス}」としてまとめられている。『世界國名盡』に示された数値は、*Grammar-School G.*からの忠実な引用である。しかし、データの掲載順序には、明らかな変更が認められる。*Grammar-School G.*が大陸別面積・人口数をアフリカ・アジア・ヨーロッパ・北アメリカ・オセアニア・南アメリカというアルファベット順に示しているのに対して、『世界國名盡』はアジア・アフリカ・ヨーロッパ・アメリカ・オセアニアの順に変更され、アジアを最初に配置している。また、国別の面積

・人口数においても、アジアを最初に取り上げ、「大日本」が一番先に登場する。これは、第IV章で考察した *Primary G.* の翻刻書である『地學初歩』と同様に、日本が属するアジアを中心に構成された世界地理書を、青木が意図的に作成していたことを示している。

第2項目の日本と諸外国との条約締結の日付に関するデータは、*Grammar-School G.* のみならず、いずれのコーネルの地理書にも記載されていない。アメリカ合衆国・オランダ・ロシア・イギリス・フランス・ポルトガル・ドイツ・スイス・ベルギー・イタリア・デンマーク・スペイン・スウェーデン・オーストリア・ハワイ・中国の16カ国との締結日が、仮調印を交わした順に示されている。この項目は、日本に関する特殊なデータであり、欧米の地理書が掲載するような内容ではない。明らかに青木が他の資料を用いて挿入したものである。「盟約通親ノ國ヲモ知ラザル者アリ」という現状を、改善するための一案であったと考えられる。

第3項目は、*Grammar-School G.* 巻末の「統計表Ⅲ：世界の主要都市ならびに1860年センサスに基づくアメリカ合衆国の主要都市の人口」からの引用である。『世界國名盡』ではアジア・ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ・オセアニアの順に、主要国の首都と通商都市が示されている。上述したように、アジアは日本が最初に取り上げられ、東京・西京・築地・横浜・長崎・兵庫・函館・新潟の8都市が挙げられている。ところが、*Grammar-School G.* の統計表Ⅲにある日本の都市は、“Jedo (エド)”と“Miaco (ミアコ)”の2都市だけである。青木は、江戸を東京に改め、通商条約により開港した都市を列挙して、日本がどのように世界に開かれているかを示した。ここにも、アジアならびに世界における日本の位置づけを明らかにしようとした青木の意図を読み取ることができる。

第3項目は、第1項目に比べて、*Grammar-School G.* からの引用が明白ではない。ヨーロッ

パ諸都市の人口は、ほとんどが *Grammar-School G.* の数値と同じであるが、ロンドンやリバプールは増加しており、逆にベルリンやハンブルグは減少している。*Grammar-School G.* の1869年版と1870年版はともに1868年版の重版であると述べたが、重版の際に数値の変更がなされたのか、あるいは青木は他の資料からより新しいデータを入手したのかは、1869年版を閲覧し得ていないので、不明である。また、南アメリカ諸国の首都であるサンチャゴ・ブエノスアイレス・リオデジャネイロなどの人口は、*Grammar-School G.* の統計表Ⅲには、記載されていない。首都名に関しては、コーネルの地理書では *First Steps in G.* からシリーズ教科書5書すべてに記載がある。しかし、人口数はいずれの書にもない。品川から海外諸都市までの距離も、言及するまでもなく、*Grammar-School G.* には記載されていない。距離が示されている都市は26都市であるが、南京・上海・広東・香港・カレー・ニューヨークのほかはすべて首都である。*Grammar-School G.* に出典が存在しない事項をまとめると、ある部分は首都に関係していることが認められる。諸外国の首都の人口や日本からの距離を示した他の文献を参照して、挿入した可能性が高い。首都を●、通商都市を○で表示する方法は、*Grammar-School G.* の統計表Ⅲが首都をすべて大文字で表している点から、発想を得たと考えられる。

最後の第4項目は、*Grammar-School G.* のレッスン20から145のなかに掲載されている地図に示された区分に準拠している。日本は「大日本之内：四國・九州・壹岐・對馬・蝦夷・佐度・琉球」（青木 1871：11）と区分されている。*Grammar-School G.* のアジアの地図をみると“Japan Islands：Nippon・Sikokf・Kiusiu・Jesso・Loo Choo Islands”と表記されている（Cornell 1870：107）。双方を比較すると、『世界國名盡』は、本州に該当するNipponを省き、隠岐・對馬・佐渡を加えていることになる。中国やイギリスの国内区分は

Grammar-School G. の地図に示されたものとまったく同じであるので、日本に関してのみ、手が加えられていることがわかる。

青木は冒頭の凡例において、「原書ニ其數ヲ缺モノハ強テ之ヲ充タサズ蓋シ誤認ヲ恐ルレバ也」(青木 1871: 凡例2) と記し、底本であるコーネルの地理書にデータを欠く部分は、敢えてこれを補足はしなかったと明言している。しかし、これに該当するのは、第1項目だけである。第2項目は、コーネルの地理書とは無関係の情報である。第3項目は、コーネルの地理書以外の文献も参照した可能性が高い。第4項目は、第3項目とともに、日本に関する複数の加筆がなされている。このように、『世界國名盡』とコーネルの地理書との比較から、『世界國名盡』の底本は *Grammar-School G.* であることと、それが単なる *Grammar-School G.* の抄訳ではないことが明らかとなった。

3. 解説書『世界國名盡解』について

筆者は、コーネルの地理書を翻訳したとされる明治初期の地理教科書を調査する過程において、『世界國名盡』の解説書が存在し、国立国会図書館に所蔵されていることを発見した。『世界國名盡解』と称するその書は、青木自らが著したものである。本節では、この『世界國名盡解』と『世界國名盡』ならびにコーネルの地理書との関係を論じることとする。

『世界國名盡』出版から2年後の1873(明治6)年、青木はその解説書として、28丁から成る『世界國名盡解』を著した。緒言には、『世界國名盡』が「我カ郷学校中初學ノ童兒ニ供セシ」「既ニ普ク小學校讀本ノ内ニ容レラレタリ」とある(青木 1873: 1)。青木は郷学校の教科書として『世界國名盡』を作成し、やがて広く小学校の読本にも用いられるようになったことが紹介されている。そして、『世界國名盡解』執筆の動機を「其書(筆者注: 『世界國名盡』) 只惜シムラクハ童蒙ノ為ニセシヲ以テ其地位寒暖人民ノ賢愚國産ノ如何ヲ記

セズ因テ今附録ヲ嗣テ本編ノ注解トナス童蒙必ズ本編ニ引合セテ習讀セハ萬國地理ノ概畧ヲ窺ニ足ム」(青木 1873: 1) と説明している。つまり、『世界國名盡』では各国の位置関係や気候・住民・産物などに関しては記載していないので、それらについて解説した『世界國名盡解』を付録として発刊したということである。

『世界國名盡解』は、緒言に続いて五大洲・アジア・ヨーロッパ・アフリカ・アメリカ・オセアニアの6単元より構成されている。『世界國名盡』では、凡例において、コーネルの地理書を底本に用いたことが明記されていたが、『世界國名盡解』には、コーネルへの言及は一切ない。しかし、以下に明らかにするように、『世界國名盡』と同じく、底本は *Grammar-School G.* であったことが認められる。『世界國名盡』が *Grammar-School G.* の表や地図を利用したのに対して、『世界國名盡解』は *Grammar-School G.* の本文を引用している。

Grammar-School G. のレッスン20から160(表4参照)は、大陸別に国の概要を学ぶ単元である。国ごとに、地理的な位置・地形・土壌・住民・交通体系・製造品と輸出品・主要都市の7項目に関して説明がなされており、『世界國名盡解』はこの部分を抄訳している。ただし、*Grammar-School G.* のアメリカ・ヨーロッパ・アジア・アフリカ・オセアニアの順序に対して、『世界國名盡解』は『世界國名盡』の順序に従い、アジアを最初に取り上げている。

Grammar-School G. の日本に関する説明と『世界國名盡解』の説明を比較すると、大きな違いが認められる。*Grammar-School G.* では「気候は寒暖の差が激しく」「土壌は不毛といわれているが、大事に耕されている」(Cornell 1870: 111) と説明されている。これに対して『世界國名盡解』には「気候は温和にして國産は五穀五金を始め他國にありて此國にあらざる物なく交易盛にして百貨輻輳し文學大いに開け且皇統は萬古不易連綿にして大古神皇の御世より今日に至るまで世々

相伝ふ是萬國に卓絶せる坤與中の一楽國というべし」(青木 1873:2) という *Grammar-School G.* には存在しない日本を賛美する文章が綴られている。他国の説明においても、ポルトガルのように日本との交流が過去にさかんであった国については、「此國往古は富強の聞へありて航海の術に巧なりしが今は大に衰へおり」(青木 1873:9) と、*Grammar-School G.* にない解説を加えている。青木は 16 世紀の大航海時代におけるポルトガルの繁栄と日本への影響を認識していたと考えられる。

『世界國名盡解』の緒言の中で青木は、『世界國名盡』では触れなかった「人民ノ賢愚」についても明らかにすると述べている。これは、*Grammar-School G.* のレッスン 15 において説明されている社会状況の 4 段階、芸術・科学・産業が高度に発展した enlightened (最文明国)、ある程度発展した civilized (文明国)、不十分な half-civilized (半文明国)、無知な savage (未開国) の分類 (Cornell 1870:12) を受けての表現と考えられる。しかし、コーネルはそれぞれの国がどの段階に当てはまるという記述はしていない¹⁶⁾。よって、『世界國名盡解』の住民に関する説明も、生物学的な種族や宗教についての記述であり、国民の賢愚を論じてはいない。

以上見てきたとおり、『世界國名盡』の解説書として出版された『世界國名盡解』は、*Grammar-School G.* を底本としながらも、青木自身による加筆が認められる。それは、本編の『世界國名盡』と同様に、単なる翻訳ではなく、日本人の視点から *Grammar-School G.* の内容を再構成するという作業であったといえる。

VII 青木輔清と東湾楼主人『萬國地理物語初篇』

第 V 章でコーネルの地理書の翻訳書を紹介した際、④『萬國地理物語初篇』の著者は青木輔清であるという可能性を指摘し、その理由として、青

木輔清が号を東江・東園と称し、東江楼主人と記名した書もある (高祖 1976:86; 1977:26) ことを挙げた。これに加えて、東湾楼主人が青木であると確定しうる論拠を、青木の『世界國名盡解』から得ることができた。

『萬國地理物語初篇』は、『世界國名盡解』と同じ弘成堂から刊行されている。『世界國名盡解』の巻末 (青木 1873:28) には、弘成堂製本書目録が付されており、この中に「青木東江訳・橋本玉蘭¹⁷⁾ 画『萬國地理茂のがた利』全八冊」というのがあり¹⁸⁾。弘成堂という一つの出版社から『萬國地理物語』という同一タイトルの書が、2 種類刊行されたということは考えにくい。『萬國地理物語初篇』は『萬國地理茂のがた利』の一部と見るのが、より自然ではないだろうか。既に第 V 章の④において、『萬國地理物語初篇』の巻末に、「アジアに続き、二編ヨーロッパ、三編アメリカ、四編アフリカ・大洋州が続刊」と広告されているが、二編以降が実際に出版されたかは不明であると述べた。それは、二編以降の存在が、今日確認されていないためである。『萬國地理物語初篇』は上下 2 冊からなる。二編から四編も各 2 冊で構成されていた確率が高い。全 8 冊の『萬國地理茂のがた利』の最初の 2 冊が、『萬國地理物語初篇』であった可能性は十分にある。よって、筆者は東湾楼主人を青木輔清とみなし、青木とコーネルの地理書の関係を論じた本論文において、『萬國地理物語初篇』を取り上げることにする。

『萬國地理物語初篇』は、築地居留地付近に在住する浦島太郎の子孫浦島屋太郎吉という町人が、コーネルの案内でアジアを旅する物語である。コーネルの地理書を底本とする他の翻訳書の教科書的な記述とは異なり、娯楽性を含んだ読み物となっている。各 22 丁の上下 2 冊からなり、22 枚の挿絵が掲載されている。第一回から第五回までの構成で、第一回は「コル子ル先生に従って横濱より飛脚船に打乗り」(東湾楼 1873:上 6) という旅の発端が語られている。第二回は船中で

コーネル先生から世界の人種の区別などの講釈を聞く話である。第三回はアジアの説明と中国、第四回はインド、第五回はペルシャとアジア西方諸国の訪問話である。

『萬國地理物語初篇』は、結論を先に述べると、コーネルの地理書だけを底本として書かれたものではないといえる。コーネルの地理書は、*Physical G.* はもとより、5種類のシリーズ教科書の内容の大半は、自然地理に関するものである。人文地理に関しては、*Intermediate G.* 以上のレベルにみられる政治地理や各国の住民・産業・都市に関する項目でわずかに言及されているに過ぎない。ところが『萬國地理物語初篇』では、人文地理的な内容が物語の多くを占めている。各訪問地の位置や地形的な特徴、主要産業などについては、コーネルの地理書を底本とした可能性が認められる。しかし、各都市の文化や歴史的背景に関する記述は、そのほとんどがコーネルの地理書には存在しない内容である。

『萬國地理物語初篇』の旅は、中国の北京から始まり、南京、広東へと移動して行く。この3都市を例に、コーネルの地理書との比較をしてみよう。まず、北京について、『萬國地理物語初篇』は、現代文に訳すと、「中国の首府であり、人民は凡そ二百五十万人、イギリスのロンドンと並び、世界で最も人口の多い都府である。万里の長城より約六十里離れている。この都市は、高さ三丈、厚さ二丈もある高い塙によって取り囲まれており、市中の人家を外からよく見ることはできないが、家屋や寺院は非常に華麗で、楼閣が連なっている。特に帝の宮殿は金銀で装飾され、草木が植え巡らされて、美麗を尽くしている。市中の往来は騒がしく、商店の雑踏や道端に乞食の夥しいことは、他国に類を見ないものである」と紹介し、「支那北京市中の有様」と題する挿絵を掲載している(東湾楼 1873 : 上 13-14)。一方、コーネルの地理書における北京の説明は、*Intermediate G.*(Cornell 1872 : 73) と *Grammar-School G.*(Cornell

1870 : 109) では「中国の首都であり、万里の長城の南方約 60 マイル、海岸より約 100 マイルの砂地の平野に位置する」と記されている。*High-School G.*(Cornell 1860 : 258) には、やや詳しく「中国の首都であり、海河の近郊、万里の長城の南方約 60 マイル、海岸より約 100 マイルの砂地の平野に位置する。非常に高い城壁によって囲まれた隣接する二つの都市から成り、韃靼人と中国人がそれぞれ居住している。韃靼人の都市には、宮殿が含まれている」とある。

次の訪問地である南京について、『萬國地理物語初篇』は「中国の旧都であり、揚子江の河口より九十四里ほどの距離にある。ここは北京に次ぐ大都会で、紙・墨・陶器・絹・綿などを多く生産する。この地には、近年まで世界的に有名な陶器の高塔があった。それは、明の永楽年間に建てられたものであった。高さ二十六丈の九層に積み重ねられた陶器は、美を尽くした奇観であったが、近年の戦で消滅してしまった」と記している(東湾楼 1873 : 上 15-16)。コーネルの地理書では、*Grammar-School G.*(Cornell 1870 : 109) と *High-School G.*(Cornell 1860 : 258) において、「南京は揚子江の右岸に位置し、中国における絹・紙・綿の主要生産地の一つである」と簡略な説明があるのみである。

続く広東について、『萬國地理物語初篇』は「広東河の左岸にあり、その河口より約三十里上流に位置する。交易の盛んな都市で、人口は約百万人、このうち三・四十万人は船に居住し、船の総数は四・五万を下らないということである。船は皆一家を成し、家族はもとより草木鳥獸を持たない船はないという実に世界でも珍しい所である。二十九年前までは、西洋との交易が唯一開かれた場所であったが、今は所々へ交易場を開いたので、この都市の交易も、昔に比べれば、やや衰えてきている」と記している(東湾楼 1873 : 上 17)。コーネルの地理書における広東の説明は、*Intermediate G.*(Cornell 1872 : 73) には「広東川の左岸に位置

し、シナ海より 70 マイル、中国の商業中心地である」とある。また、*Grammar-School G.*(Cornell 1870:109,122)も「広東川の河口より約 70 マイルの商業開放都市で、人口 100 万人である」とほぼ同じ内容である。*High-School G.* (Cornell 1860:258)には「広東川の左岸、河口より約 70 マイルに位置する。中国の商業中心地、貿易開放港の一つであり、茶が大規模に取引されている」とある。

以上、北京・南京・広東の 3 都市に関する『萬國地理物語初篇』とコーネルの地理書の記述内容を抜粋してみた。各都市の位置や主要産業などの説明は、両者に類似した記述が存在する。しかし、『萬國地理物語初篇』において、それらは導入的な記述であり、話の中心は、コーネルの地理書にはない都市景観や歴史にまつわるエピソードである。『萬國地理物語初篇』の 3 都市の記述に共通しているのは、コーネルの地理書から引用したとみなすことができる地理的情報をまず紹介した上で、他の文献から得たと思われる歴史や文化的情報を見聞録風に綴っている点である。各都市の位置・地形・産業などの地理的な情報は、内容の類似性から判断して、*High-School G.* を底本としたと考える。

『萬國地理物語初篇』には、コーネルの地理書に説明のない「万里の長城」や「死海」が世界七不思議の一つとして、また「纏足」の風習が世界三奇風の一つとして紹介されている。そして、それらに関するより詳しい文献として、七不思議に関しては「皆萬國奇談と申す書に悉しく鮮て御坐る」と述べ、『萬國奇談』を挙げている。また、三奇風に関しては「世界の異風の事は珍奇物語といふ書に悉しく記してあるから御覧なされ」と、『珍奇物語』を挙げている（東湾楼 1873:上 15-17, 下 12-13）。『萬國奇談』は、青木輔清が 1873 (明治 6) 年にグッドリッチ (Samuel G. Goodrich) の *Peter Parley's Universal History on the Basis of Geography*(1837) などを抄訳した『萬國奇

談 一名七不思議』とみて間違いない。一方『珍奇物語』は、東江楼主人による『珍奇物語 童蒙弁惑 初篇』(1872・明治 5 年)に間違いない。青木輔清が東江楼主人とも名乗っていたことは、すでに述べた。『萬國奇談』と『珍奇物語』への言及は、他人の著作紹介というよりも、自らの前著に詳細があることを説明しているとみるのが妥当ではないだろうか。著者名も挙げずに、一他人の著作を次々に取り上げるのは、不自然である。とすれば、『萬國地理物語初篇』の著者東湾楼主人は、青木輔清であるという説がより有力となってくる。

『萬國奇談 一名七不思議』の主要な底本である『パーレー万国史』と呼ばれた *Peter Parley's Universal History on the Basis of Geography* は、中国の風習である女性の纏足について「中国の女性に関して特に注目すべきものは、足が小さいことである。成人した女性でも、アメリカの幼女よりも小さな靴を履くことができる。しかし、彼女たちの足は、単に見世物として存在し、歩くためにはほとんど役に立たない」と記している (Goodrich 1889:109)。『萬國地理物語初篇』には、「この国では足の小さな婦人を美人と言い、女子が誕生すると足かせをはめて大きくならないようにするので、他人の肩でも携えなければよく歩けない」とある (東湾楼 1873:上 16-17)。『パーレー万国史』からの直訳とは言えないが、万国史に類する文献が参照されていたことは確かであろう。

以上の考察から、『萬國地理物語初篇』に関して、次の 2 点が明らかになった。著者の東湾楼主人は、青木輔清である可能性が極めて高い。地理的な記述はコーネルの *High-School G.* を参照し、歴史や文化に関する記述はグッドリッチの *Peter Parley's Universal History on the Basis of Geography* などを参照したと考えられる。

次に挿絵についてであるが、『萬國地理物語初篇』に掲載されている 22 の挿絵は、コーネルの地理書からの引用ではない。しかし、この中の 2

点に関しては、コーネルの地理書に類似した絵を見出すことができる。1点目は『萬國地理物語初篇』の表紙である。教師が子どもたちに世界地図を示している絵で、コーネルの *First Steps in G.* (Cornell 1876: 3) に類似したものがある。*First Steps in G.* の絵から着想を得て、描かれたと推測できる。『萬國地理物語初篇』の絵は、*First Steps in G.* と同じく、教師も生徒も洋装をしているが、教師が女性から男性になっている。19世紀後半のアメリカでは、女性が初等学校教師の大半を占めていた。したがって、女性の教師が子どもに地図を教えるという光景は、ごく日常的なものであったといえる。コーネルの地理書の著者自身がそのような教師の一人であった。しかし、『萬國地理物語初篇』の著者東湾楼主人には、旅の案内役を任じたコーネルが女性であったとの認識はなかったとみられる。桑原 (1990: 181) は、文政年間から幕末 (1830年～1867年) の江戸時代後期に、庶民の知識階層に属する女性がどのような著作活動を行っていたかを調査している。それによると、女性の著作は俳句・和歌が38と圧倒的に多いが、日記・紀行も14ある。紀行文は通常、地誌的な記述を含んでおり、地理書の一種とみなすことができる。しかし、コーネルの地理書のような、女性により書かれた教科書は存在していない¹⁹⁾。ちなみに、日本で女子師範学校が設立されるのは、1874(明治7)年のことである。

2点目は、第二回の船中でコーネル先生から世界の人種の区別などの講釈を聞く箇所に示された人種の絵 (東湾楼 1873: 上11) である。*Grammar-School G.* (Cornell 1870: 12) の政治地理に示された人種の絵と類似している。*Grammar-School G.* では「世界には5つの人種が存在し、コーカサス人は白色、モンゴル人は黄色、アメリカ人は赤褐色、アフリカ人は黒色、マレー人は茶色の肌をしている」と説明されているが、『萬國地理物語初篇』にも同様の解説がある。よって、*Grammar-School G.* の挿絵と本文が共に参照

されたと考えられる。個々の顔形は異なるが、構図的には近似しているといえよう。

本文と挿絵の比較を総合すると、*High-School G.* に加えて、*First Steps in G.* と *Grammar-School G.* という少なくとも3種類のコーネルの地理書が『萬國地理物語初篇』の執筆に利用されたとみることができる。

VIII おわりに

コーネルの地理書は、幕末に日本にもたらされ、明治10年代の半ば頃までの約20年間に、翻刻書や10冊を超える翻訳書が作成された。日本の教科書史において、この時期は翻訳教科書時代と呼ばれ、数多くの翻訳教科書が出版されたが、本論文で紹介したコーネルの地理書を底本とする複数の翻訳書も、この時代の産物である。

本論文では、コーネルの地理書の最初の翻訳書と考えられる青木輔清の『世界國名盡』とその解説書『世界國名盡解』に着目し、同書がコーネルの *Grammar-School G.* を底本としていたことを明らかにした。これまで *Grammar-School G.* は、福沢諭吉が幕末にアメリカで購入した教科書の一つであった (金子 1979: 110) ことと *Primary G.* の翻刻書『地學初歩』の日本の部分に引用された (石山 1965: 3) ことを除いては、日本への影響は詳らかでなかった。

Grammar-School G. は、*Primary G.* と *Intermediate G.* の修了者用あるいは *Intermediate G.* に代わる教科書である。*Primary G.* は、幕末に翻刻書『地學初歩』とその翻訳書『地學初歩和解』が刊行されており、青木はその上のレベルである *Grammar-School G.* の翻訳を試みたと考えられる。

また、『萬國地理物語初篇』の著者である東湾楼主人は、青木輔清であることがほぼ確定できた。『萬國地理物語初篇』は、既述したように、*First Steps in G.*・*Grammar-School G.*・*High-School G.* の参照が認められる。これは、青木が複数のコーネ

ルの地理書に接していたことを示している。

本論文が明らかにした『地學初歩』・『世界國名盡』・『世界國名盡解』・『萬國地理物語初篇』の底本と、すでに筆者が特定していた『地理初歩』ならびに『小學地理問答』の底本(齋藤 2005a; 齋藤 2006)とを合わせると、*First Steps in G.* から *High-School G.* に至る5種類のシリーズ教科書のすべてを含むことがわかる。加えて、コーネルの地理書の残りの一冊である自然地理を扱った *Physical G.* は、本論文第V章で紹介した⑥鳥山啓『訓蒙天然地理學』と⑩帆足義兼『地形論』の底本として用いられていることがすでに指摘されている(鮎澤 1952: 64; 日本地学史編纂委員会ほか 1993: 884)。よって、コーネルの地理書と総称した6種類の地理教科書はいずれも、翻訳教科書時代の地理教科書の底本として使用されていたことが判明した。この考察結果から、コーネルの地理書は、幕末・明治初期の地理教育に大きな影響を及ぼしていたと結論づけることができよう。

注記

- 1) The American Geographical and Statistical Society は、1851年に成立したアメリカで最初の地理学関係の学会である。コーネルが *corresponding member* であったという事実は、英国の王立地理学協会(The Royal Geographical Society)が1915年まで女性会員を認めていなかった(Domosh 1991: 97)のに対して、アメリカの地理学会が女性の入会を承認していたことを示している。
- 2) 1882年に出版された *Daughters of America* は、19世紀に活躍したアメリカ女性を紹介した書であるが、この中の教育者の章にコーネルも取り上げられている。それによると、コーネルは革新的な地理教育システムを編み出し、その後の公立学校用地理教科書に多大な影響を及ぼした女性であった。コネチカット州ニューロンドンに生まれ、15歳で教師となり、長年公立学校の校長を務めた後、教科書の執筆に専念し、1875年ニューヨーク州オウエゴで死去した(Hanaford 1882:519-520)。近年、Pittser(1997: 241-243)が *Daughters of America* のコー

ネルに関する記述を検証するため、コネチカット州とニューヨーク州オウエゴの歴史協会、コロンビア大学の教員大学図書館などに、コーネルの出生や死亡、職歴に関する調査を依頼したところ、いずれからもコーネルの存在を証明できる記録は発見できなかったということである。筆者は、The American Geographical and Statistical Societyの学会誌に、コーネルの投稿論文が掲載されていないか、Brooks(1918)を用いて調査を行った。だが、今日の *Geographical Review* (1916-)に至る *Bulletin of the American Geographical and Statistical Society*(1852-56), *Journal of the American Geographical and Statistical Society*(1859-60,1870), *Proceedings of the American Geographical and Statistical Society*(1862-64), *Journal of the American Geographical Society of New York*(1872-1900), *Bulletin of the American Geographical Society*(1901-1915)のいずれにもコーネルの名前は発見できなかった。

- 3) オランダ語を学ぶ蘭学に対して、英語を学ぶ学問を英学と称した。英学は明治中期には、英語学・英米文学へと分岐、発展していく(惣郷 1990: 280)。
- 4) 筆者は、これまで、学制公布の翌年1873(明治6)年師範学校の編纂により文部省が刊行した最初の官製地理教科書『地理初歩』はコーネルの *Primary Geography* を底本とし、1874(明治7)年に大阪師範学校に勤務する井出猪之助が刊行した『小學地理問答』はコーネルの *First Steps in Geography* を底本としていることを明らかにした(齋藤 2005a; 齋藤 2006)。また、コーネルの地理書の原書は、明治初期にアメリカからやってきたプロテスタント教会の女性宣教師により日本各地に設立された女学校、例えば、海岸女学校(青山学院の前身)・共立女学校(横浜共立学園の前身)・桜井女学校(女子学院の前身)などにおいて、地理の教科書として使用されていたことも明らかにした(齋藤 2005 b: 122)。
- 5) *First Steps in G.*(1876・第2版), *Primary G.* (1857・第2版), *Intermediate G.* (1872・第2版), *Grammar-School G.* (1870・第2版), *High-School G.* (1860・第1版), *Physical G.* (1883・第1版)を使用した。

- 6) 渡部は『地學初歩』のほかにも、オランダ人によって書かれた英蘭会話書の英語部分を翻刻した『英吉利会話』(1867・慶応3年)、約1700の例文を掲載した『英蘭会話訳語』(1868・明治元年)、英語の経済書から価値・賃金・資本などの項目を抜粋した『経済説略』(1869・明治2年)、コロンブス・ニュートン・ワシントン・ナポレオンなどの伝記を抜粋した『西洋蒙求』(1870・明治3年)、『英國史略』(1870・明治3年)、『英文 ^{イソップ}伊曾保物語』(1871・明治4年)などの英学書を刊行している(惣郷 1990:105,184,226,228).
- 7) 第3版は『地學初歩』より後の1867年に出されている(Cornell 1875:6).
- 8) 翻訳者の宇田川や榎木も、渡部と同様に、英学を専門に志した人物である。宇田川は名を準一、号を榕精と称した。津山藩医の家系にあり、江戸で3年間医学と蘭学を修めた(武内 1994:61)。宇田川は『地學初歩和解』のほかに、アメリカ人カッケンボス(George Quackenbos)の*Natural Philosophy*とフランス人ガノー(Ganot)の著作を訳した『物理全志』(1875・明治8年)、イギリス人ロスコー(Henry Roscoe)の化学書を訳した『化学階梯』(1881・明治14年)、アメリカの医学博士ハチンソン(Hutchinson)が1878年に出版した*A Treatise on Physiology and Hygiene for Educational Institutions and General Readers*を翻訳したと考えられる『小學生理問答』(1881・明治14年)等の著作がある(唐澤 1984:799;武内 1994:61)。一方、榎木は、『地學初歩挿訳』と同じ1872(明治5)年にピネオ(Timothy Pinneo)の*Pinneo's Primary Grammar of the English Language for Beginners*(1849)を訳した『挿訳英文典』を出版した。また同年には、ピネオの文法書に登場する単語と博物・地理の教科書から収集した単語を合わせて『文典・理学・地学 三書字類』という辞書を作成している(惣郷 1990:271)。榎木が参照した地理の教科書は、同じ時期に『地學初歩』の翻訳書『地學初歩挿訳』を出版していることから、『地學初歩』であったと考えられる。筆者は、榎木が『地學初歩』より訳出した「嶋(island)」「半島(peninsula)」「地峡(isthmus)」「岬(cape・promontory)」「濱(shore)」「海岸(coast)」「山(mountain)」「火山(volcano)」などの地理用語を『文典・理学・地学 三書字類』に求めた結果、いずれも収録されていることが確認できた。さらに榎木は、コーネルの地理書が取り上げた地名を翻訳し一覧化した「世界地名表」(48cm×36cm・銅版、京都大学附属図書館室賀文庫に所蔵)を1873(明治6)年に作成している。
- 9) そのほかの翻訳書としては、グッドリッチ(Samuel G. Goodrich)の*Peter Parley's Universal History on the Basis of Geography*(1837)ほかの抄訳『萬國奇談 一名七不思議』(1873・明治6年)やウィルソン(Marcus Willson)の*The First Reader of the School and Family Series*(1860)の訳本『ウキルソン氏第一リードル読法改良直訳』(1886・明治19年)などを残している。参考書・辞書としては、1871(明治4)年にアルファベットの読み方・書き方・発音記号・文法などを概説した『横文字独学』を出版し、1873(明治6)年には、久留米藩主有馬頼咸が設立した私立有馬学校から、青木の編纂により2万5千語を収録した掌に入る携帯に便利な小型辞書『英和掌中字典』が出された(惣郷 1990:192-193,224).
- 10) 南方熊楠記念館. 熊楠の生涯: 幼少・在京時代. <http://www.minakatakumagusu-kinenkan.jp/kumagusu/life/life.htm#yousyouzaikyoku> (最終閲覧日:2009年1月16日). 『訓蒙天然地理學』のほかに、スウィフト(Mary A. Swift)の*First Lessons on Natural Philosophy, for Children*(1859)を訳した『童蒙窮理問答』(1873・明治6年)などの著作がある。
- 11) 広島県立福山誠之館高等学校同窓会. 誠之館人物誌: 井出猪之助. <http://wp1.fuchu.jp/~sei-dou/jinmeiroku/ide-inosuke/ide-inosuke.htm> (最終閲覧日:2009年1月16日)
- 12) 沼津市明治史料館. 代戯館: 沼津兵学校附属小学校. <http://daigikan.daa.jp/> (最終閲覧日:2009年1月16日)
- 13) 『萬國歌盡』のほか、『皇国体歌盡』(1875・明治8年)、『修身歌盡』(1877・明治10年)、『天文歌盡』(1877・明治10年)、『一騎歌盡』(1907・明治40年)といった一連の歌盡を著している。
- 14) 広島県立福山誠之館高等学校同窓会. 誠之館人物誌: 関藤成緒. <http://wp1.fuchu.jp/~sei-dou/jinmeiroku/sekitou-naruo/sekitou-naruo.htm> (最終閲覧日:2009年1月16日)
- 15) 『世界國名盡』より以前の出版物では、源(1997)

が福沢諭吉の『世界國畫』(1869・明治2年)の書誌学的な調査を試み、挿絵図にコーネルの *Primary G.* と *High-School G.* からの転写があることを明らかにしている。

- 16) コーネルは *Physical G.* においては, enlightened としてアメリカ合衆国・イギリス・フランス・ドイツ, civilized として日本・中国・サンドイッチ諸島, half - civilized としてメキシコならびに中央アメリカのインディアンの大半・北アフリカ諸国の大半など, barbarous (savage と同義) としてオーストラリアの先住民民族・北アメリカのインディアン・多くのアフリカの黒人部族などを挙げている (Cornell 1883 : 82).
- 17) 橋本玉蘭は, 幕末から明治初期にかけて多くの地図を描いた地図作家で, 横浜の浮世絵師五雲亭(歌川)貞秀としても知られていた。地図作家としての玉蘭には, 地理学者山崎直方, 矢守一彦らが注目している(三好 1999)。『萬國地理物語初篇』には, 玉蘭の名はない。
- 18) 筆者が閲覧した『世界國名畫』は埼玉県洋学校蔵版であったが, 同書も弘成堂製本書目録に記載されている。また, 西村恒方の『萬國地理訓蒙』も目録にある。つまりは『世界國名畫』・『萬國地理訓蒙』・『萬國地理物語初篇』・『世界國名畫解』というコーネルの地理書を底本とした4種類の翻訳書が, 弘成堂より刊行されていたことになる。
- 19) 桑原(1990:181)の調査では, 江戸時代中期(1711年~1750年)には, 女性により書かれた教科書が3書刊行されている。

史料

- 青木東江 1871.『世界國名畫』埼玉県洋学校蔵版。
青木東江 1873.『世界國名畫解』弘成堂。
井出猪之助 1874.『小學地理問答』文敬堂。
井出猪之助 1876.『改正萬國地誌略』竜草堂。
色川御胤 1873.『訓蒙圖解地學のふみ』産靈社。
宇田川榕精 1867.『地學初歩和解 全』風雲堂蔵版。
尾形良造 刊行年不詳.『地學初歩直訳』発行元不詳。
榎木寛則 1872a.『地學初歩挿訳』青黎閣。
榎木寛則 1872b.『文典・理学・地学 三書字類』森屋治兵衛。
コル子ル 1866.『地學初歩』江戸：渡部氏蔵版。

- 師範学校 1873.『地理初歩 全』文部省。
加藤熙 1877.『小學諸誦 萬國歌畫』聚星館。
関藤成緒 1883.『學校用地文學』吉川半七。
東湾楼主人 1873.『萬國地理物語初篇』萬蘊堂・弘成堂。
鳥山啓 1873.『訓蒙天然地理學』書友社。
名和謙次 1785.『小學教授次第 萬國地理部 五編』集義社。
西村恒方 1872.『萬國地理訓蒙』弘成堂。
帆足義兼 1877-1879.『地形論』山形屋半次郎。

- Brooks,A.A. 1918. *Index to Bulletin of the American Geographical Society 1852-1915*. New York : The American Geographical Society.
Cornell,S.S. 1857. *Cornell's Primary Geography*. New York : D.Appleton and Company.
Cornell,S.S. 1860. *Cornell's High-School Geography*. New York : D.Appleton and Company.
Cornell,S.S. 1870. *Cornell's Grammar-School Geography*. New York : D.Appleton and Company.
Cornell,S.S. 1872. *Cornell's Intermediate Geography*. New York : D.Appleton and Company.
Cornell,S.S. 1875. *Cornell's Primary Geography*. New York : D.Appleton and Company.
Cornell,S.S.1876.*Cornell's First Steps in Geography*. New York : D.Appleton and Company.
Cornell,S.S. 1883. *Cornell's Physical Geography*. New York : D.Appleton and Company.
Goodrich,S.G. 1889. *Peter Parley's Universal History on the Basis of Geography*. Tokyo : Torindow or T.Ishikawa & Sons. (The first edition in 1873)
Hanaford,P.A. 1882. *Daughters of America,or,Women of the Century*. Augusta, Main : True and Company.

参考文献

- 鮎澤信太郎 1952. 地理学の明治維新—コーネルの地學初歩について—。内田寛一先生還暦祝賀会編『内田寛一先生還暦記念地理学論文集 上巻』56-69. 帝国書院。
池田哲郎 1979.『日本英学風土記』篠崎書林。
石川謙 1957.『近世の学校』高陵社。

- 石山洋 1965. 英学における地理書について. 日本英学史研究会研究報告 26:1-4.
- 石山洋 1975. 日本の地理教科書の変遷—幕末・明治前期をめぐる—. 地理 205:16-21.
- 石山洋・鈴木瑞枝・南啓治編, 朝倉治彦監修 1996. 『江戸文人辞典—国学者・漢学者・洋学者—』東京堂出版.
- 大庭穰治 1996. 葵文庫に見る英米地理書について. 葵 (静岡県立中央図書館報) 30:32-41.
- 海後宗臣編 1966. 『日本教科書大系 近代編 第十七巻 地理(三)』講談社.
- 金子宏二 1979. 『藩養学養賢堂蔵洋書目録』について—慶応三年福沢諭吉将来本—. 早稲田大学図書館紀要 20:98-113.
- 唐澤富太郎 1984. 『図説教育人物事典 中巻—日本教育史のなかの教育者群像—』ぎょうせい.
- 桑原恵 1990. 近世的教養文化と女性. 女性史総合研究会編『日本女性生活史 第3巻 近世』171-202. 東京大学出版会.
- 高祖敏明 1976. 明治初期翻訳教科書に関する一考察—青木輔清編『小学教諭民家童蒙解』の原書をめぐって—. 上智大学教育学論集 11:84-101.
- 高祖敏明 1977. 文部省「小学教則」(明治5年9月)の「民家童蒙解」. 教育学研究 44-1:23-32.
- 齋藤元子 2005a. 師範学校編纂『地理初歩』とその底本. 地理学評論 78-6:413-425.
- 齋藤元子 2005b. 『「地理的知識」の普及と明治期来日アメリカ人女性宣教師』. お茶の水女子大学提出学位論文.
- 齋藤元子 2006. 井出猪之助著『小学地理問答』とコーネルの地理書. 人間文化論叢 9:103-111.
- 惣郷正明 1990. 『日本英学のあけぼの—幕末・明治の英語学—』創拓社.
- 武内博編著 1994. 『日本洋学人名事典』柏書房.
- 仲新 1949. 『近代教科書の成立』講談社.
- 中川浩一 1978. 『近代地理教育の源流』古今書院.
- 日本地学史編集委員会・東京地学協会 1993. 西洋地学導入(明治元年～明治24年)〈その2〉—「日本地学史」稿抄—. 地学雑誌 102-7:878-889.
- 廣政直彦 1993. 西洋科学技術の導入と研究教育機関. 幕末・明治初期における西洋文明の導入に関する研究会編『洋学事始—幕末・維新时期西洋文明の導入—』159-180. 文化書房博文社.
- 源昌久 1997. 福沢諭吉『世界国尽』に関する一研究—書誌学的調査—. 空間・社会・地理思想 2:2-18.
- 三好唯義 1999. 貞秀=玉蘭齋ノート—地図および地図的作品への手がかりとして—. 神戸市立博物館研究紀要 15:23-40.
- Domosh, M. 1991. Toward a feminist historiography of geography. *Transaction. Institute of British Geographers, New Series*, 16: 95-104. ドモシユ, M. 著, 齋藤元子訳 2001. 地理学の新しいフェミニスト歴史叙述をめざして. 空間・社会・地理思想 6:150-160.
- Pittser, S.E. 1997. *Women in Geography Education, 1783 to 1932*. Doctoral dissertation, Kansas State University.

さいとう・もとこ

お茶の水女子大学・明治学院大学・東京女子大学
非常勤講師

The Influence of Cornell's Geography Textbooks on Japan in the Second Half of the 19th Century

SAITO Motoko (Ochanomizu University, Meiji Gakuin University
and Tokyo Woman's Christian University)